

大学生における“コミュニケーション力”イメージと 態度との関連

渡部 麻美

キーワード：コミュニケーション力、社会的スキル、大学生

communication skills, social skills, undergraduate students

近年、“コミュニケーション力”が子どもや若者にとって重要な能力であるという認識が、社会全体で共有されている（平井，2009）。文化庁（2017）が全国の16歳以上の男女を対象に実施した調査では、“コミュニケーション力”を重要だと思う人は全ての世代で90%を超えており、20代では100%に至った。しかし、“コミュニケーション力”には学術的に明確な定義がない（小川・矢崎・斎藤，2008；小川，2010）。小川（2010）によれば、大学生を対象に“コミュニケーション力”から想起する単語をたずねたところ、「会話」「笑顔」「対人関係（人間関係）」「あいさつ」「積極性」「協調性」「話す（能）力」「思いやり」が多く挙げられた。小川（2010）の結果から、大学生が“コミュニケーション力”を積極的な会話や他者との調和的な関係を実現するための能力であるとみなしていると推察される。しかし、学年や所属学部、職業体験の有無などによって、何を“コミュニケーション力”と考えるかは異なるといわれている（小川・矢崎・斎藤，2008；小川・矢崎・斎藤，2009；矢崎・小川・斎藤，2009；小川，2010；斎藤・小川・矢崎，2011）。本研究ではこれ以降、個人がどのような能力を“コミュニケーション力”とみなしているのかを、“コミュニケーション力”イメージと表記する。

“コミュニケーション力”が重要視される一方で、“コミュニケーション力”という言葉が過剰に普及することを疑問視する見解も示されている。東京工芸大学（2012）による大学生を対象とした調査では、“コミュニケーション力”が重要視されすぎる風潮があると考えた人の割合が、回答者の7割を超えていた。“コミュニケーション力”に対する態度の構造を検討した渡部（2016a）では、大学生が“コミュニケーション力”を幅広い領域で必要な能力であると認めているものの、内容がわかりにくいと考えていることが明らかになった。他にも、“コミュニケーション力”を個人の先天的資質と捉えることへの疑念や、対人関係

の問題を個人の能力に還元することへの批判（貴戸，2011；平田，2012；川島・加藤・芝木，2014）などが提示されている。

このように、社会生活を送る上で重要な能力であるはずの“コミュニケーション力”に対して否定的な態度を持つ人が存在する。しかし、小川他（2008，2009）などの一連の研究が示すように、“コミュニケーション力”としてすべての人が同じ内容を想定しているわけではない。その内容に応じて、“コミュニケーション力”に対する態度も異なると予想される。

また、自身が“コミュニケーション力”をどの程度身につけているかという自己評価も、“コミュニケーション力”に対する態度に影響すると考えられる。太田（2014）の社会人に対するインターネット調査によれば、“コミュニケーション力”の自己評価が高い場合に、“コミュニケーション力”による評価を望ましく考えやすい傾向があった。自身の“コミュニケーション力”が高いと自覚する人は、社会において“コミュニケーション力”が重視されることを受容し、さらに“コミュニケーション力”を高めていこうと動機づけられることが予想される。

“コミュニケーション力”と類似する既存の概念として、社会的スキル（ソーシャルスキル，social skills）が挙げられる。社会的スキルが想定しているのは全般的な社会的相互作用であるのに対し、“コミュニケーション力”はコミュニケーション場面に限定した能力であることから、“コミュニケーション力”は社会的スキルの一側面とみなされる（小川，2012）。ただし、一般に日常用語としての“コミュニケーション力”は、社会的スキルと区別されることなく使用されている（Hargie，2006）。一般の人々にとって、社会的スキルの自己評価は、“コミュニケーション力”の自己評価とほぼ一致したものであるか、あるいは“コミュニケーション力”の自己評価を包含したものであると考えられる。渡部（2016a）による大学生の調査では、社会的スキルの高群・低群間で“コミュニケーション力”に対する態度に差がないという、太田（2014）とは整合しない結果がみられた。したがって、社会的スキルまたは“コミュニケーション力”の自己評価と“コミュニケーション力”に対する態度とがどのように関連するのか、一貫した知見が得られていないといえる。

社会的スキルの高い人は、幸福感が高く、ストレスや心理社会的問題に強い耐性を持つと考えられている（Hargie，2006）。医療、福祉、矯正、教育などの領域では、対人的不適応や心理社会的問題を抱える人の治療や予防的介入方法として、社会的スキルトレーニングが実施されてきた（菊池，2007；相川，2009）。近年、就業における“コミュニケーション力”の重要性が認識される中、大学生を対象とした社会的スキルトレーニングも盛んに実施されている（e.g., 太幡，2017；渡部，2017）。しかし、教育場面において特定の“コミュニケーション力”イメージを提示し、その学習を強いることで、“コミュニケーション力”の自己評価が低い人々が、コミュニケーション場面そのものから撤退する恐れがあることも指摘さ

れている（平井，2009；仲，2012）。つまり、社会的スキルトレーニングの参加者の“コミュニケーション力”または社会的スキルの自己評価が低い場合、トレーニングで提示される“コミュニケーション力”イメージの内容次第で、対人場面の回避や“コミュニケーション力”獲得への動機づけの低下が起り得る。

以上より、本研究では大学生を対象に、個人の“コミュニケーション力”イメージが、対人関係を“コミュニケーション力”の視点で捉えることに対する態度や社会的スキルの高さとどのように関連するのかを検討する。また、本研究の結果をふまえて、社会的スキルトレーニングにおいて動機づけの低下を防ぎ、トレーニングの効率性を高める方略について考察する。

方法

大学生調査

本研究の調査は、放送大学ICT活用・遠隔教育センターのREAS（Real time Evaluation Assistant System：リアルタイム評価支援システム）を使用して実施された。REASには、web上での調査票の作成や集計および集計閲覧機能、回答データのCSV形式によるダウンロード機能が備えられている（芝崎・近藤，2008）。2015年1月と2015年6月に大学の授業内で回答ページのURLを記した文書を配布し、調査への参加を依頼した。調査対象者は、私立女子大学の学生174名であった。平均年齢は19.6歳（SD=0.8）であった。調査対象者には、調査への回答は強制されるものではなく対象者の自由意志により決定できること、個人情報保護されること、回答をもって調査協力に同意したとみなすことを説明した。回答者はその場で各自のスマートフォンを介して調査サイトにアクセスし、調査項目に回答した。

調査項目は以下の（1）～（4）であった。

（1）“コミュニケーション力”への接触経験

調査対象者が“コミュニケーション力”という言葉に接触したことがあるかをたずねた。「ふだんの生活の中で、“コミュニケーション力”、“コミュニケーション能力”、“コミュ力”などの言葉を、見たり聞いたりしたことがありますか」と教示し、「ある」と「ない」のいずれかを選択するよう求めた。

この質問項目のあとに、「これ以降、“コミュニケーション力”、“コミュニケーション能力”、“コミュ力”などの言葉を、“コミュニケーション力”と統一して表記します。“コミュニケーション力”と表記された場合、これらの言葉全部をまとめて指すものとお考えください」と教示して、（2）～（4）の項目についてたずねた。

（2）“コミュニケーション力”イメージをたずねる項目

調査対象者が“コミュニケーション力”をどのような能力であると考えているかをたずね

るために、「“コミュニケーション力”とは、どのような能力だと思いますか。あなた自身の考えをご自由にお書きください」と教示し、自由記述によって回答を求めた。

(3) “コミュニケーション力”に対する態度を測定する項目

“コミュニケーション力”に対する態度尺度（渡部，2016a）の25項目を使用した。この尺度は、“コミュニケーション力”という言葉に対してどのような態度を保持しているか測定するものであり、汎用性、不確定性、要求過剰性、絶対性、測定可能性の5つの下位尺度で構成されていた。選択肢は「とてもそう思う（6）」～「まったくそう思わない（1）」の6件法であった。

(4) 社会的スキルを測定する項目

菊池（1988）の社会的スキル尺度（Kikuchi's Scale of Social Skills；KiSS-18）の18項目を使用した。この尺度はGoldstein et al.（1980）が分類した若者のための社会的スキルのリストを元に作成された、個人の社会的スキルを総体的に測定することを意図した尺度である（菊池，2007）。選択肢は「いつもそうだ（5）」～「いつもそうでない（1）」の5件法であった。

結果

“コミュニケーション力”に対する態度の構造

“コミュニケーション力”への接触経験をたずねる項目において、「ない」と回答した3名の回答者を除く171名のデータを用いて、これ以降の分析を実施した。

“コミュニケーション力”に対する態度尺度の25項目について、因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況から4因子解が適当と判断し、再度4因子指定で分析を行った。負荷量が.40に満たない項目と複数の因子に.40以上の負荷量を示す項目を削除し、同様の因子分析を繰り返した。3回目の分析結果をTable1に示す。第1因子は、“コミュニケーション力”という言葉の意味の不確かさや安易に使用されていることを示す内容であったため、「不確定性」因子と解釈した。第2因子は、場面によって求められる“コミュニケーション力”の内容が変化することや、現代社会で特に“コミュニケーション力”の重要性が高まっていることを示す内容であることから、「流動的汎用性」因子と解釈した。第3因子は、“コミュニケーション力”の有無が個人の価値を左右する絶対的な問題であることを示す内容であったため、「絶対性」因子と解釈した。第4因子は、“コミュニケーション力”が数値などで測定できることを示す内容であったため、「測定可能性」因子と解釈した。

各尺度について、クロンバックの α 係数を算出した結果をTable1に記す。絶対性と測定可能性については.70を下回っていたものの、項目数を考慮し、十分な信頼性であると判断した。

Table1 “コミュニケーション力”に対する態度尺度の因子分析
(主因子法・プロマックス回転・4因子指定)

	1	2	3	4
不確定性 $\alpha = .80$				
コミュニケーション力という言葉は意味があいまいだ。	.79	-.04	-.04	-.05
コミュニケーション力という言葉はうさんくさい。	.67	-.23	.16	-.09
コミュニケーション力はどうような能力なのかわかりにくい。	.62	-.02	.02	-.09
コミュニケーション力という言葉は表面的である。	.60	.13	-.12	.09
コミュニケーション力は一時的に流行しているだけだ。	.59	-.18	.01	.08
コミュニケーション力という言葉は安易に使われている。	.53	.10	.01	-.04
今の社会はコミュニケーション力のない人を排除している。	.44	.09	.17	.03
流動的汎用性 $\alpha = .72$				
相手や状況によって必要なコミュニケーション力が変わる。	-.03	.59	-.14	.06
コミュニケーション力はあらゆる場面で使われている。	-.17	.56	-.08	.09
コミュニケーション力は仕事をする上で必要だ。	-.11	.55	.23	-.14
今の社会ではコミュニケーション力が過剰に要求されている。	.30	.51	-.20	.03
今の社会では、コミュニケーション力のある人が影響力を持っている。	.04	.47	.13	-.14
今は昔よりも高度なコミュニケーション力が必要になっている。	.31	.45	.02	.07
コミュニケーション力は他者と良い関係を保つために必要だ。	-.05	.44	.29	.00
コミュニケーション力には様々な要素がふくまれている。	.09	.42	-.16	-.02
今の社会においてコミュニケーション力は特に重要な能力だ。	-.22	.40	.09	-.01
絶対性 $\alpha = .67$				
コミュニケーション力のない人は絶望的だ。	.11	.00	.78	.03
コミュニケーション力があるかどうかは、その人にとって深刻な問題だ。	-.03	.25	.53	-.04
コミュニケーション力があるかどうかは、人間の価値に直結する。	.12	.07	.52	.25
コミュニケーション力以外にも重要なことはある。	.08	.33	-.48	-.02
測定可能性 $\alpha = .64$				
コミュニケーション力は数値化することができる。	-.02	-.01	.02	.79
コミュニケーション力は何らかの方法で測定できる。	-.07	-.04	.12	.57
負荷量平方和	3.03	2.79	2.32	1.55
因子相関行列				
	1	.03	.05	.30
	2		.41	.10
	3			.26

社会的スキル尺度について主成分分析を行ったところ、「何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか」と「気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか」の2項目の成分負荷量の絶対値が.40を下回った。これらの2項目を除いた16項目を、逆転項目の処理を行なったうえで合計し、社会的スキル得点とした。16項目のクロンバックの α 係数は、

Table2 各得点の記述統計量と得点間の相関係数

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	不確定性	流動的汎用性	絶対性	測定可能性
不確定性	166	24.91	5.08				
流動的汎用性	168	45.34	4.34	.10			
絶対性	170	13.04	3.03	.15	.34 **		
測定可能性	171	6.01	1.84	.15	.10	.33 **	
社会的スキル	165	50.33	9.91	-.16 *	.05	-.26 **	-.03

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

$\alpha = .88$ であった。

“コミュニケーション力”に対する態度と社会的スキルの各得点の記述統計量と各得点間の相関係数をTable2に記載する。

“コミュニケーション力”イメージの自由記述の分類

“コミュニケーション力”イメージの自由記述回答を、心理学を専攻する大学4年生3名と筆者が記述内容をもとに分類した。1つの回答に複数の内容が含まれる場合は、最初に記入されている内容を基準に分類を行った。その結果、“コミュニケーション力”イメージは8つのカテゴリに分類された (Table3)。第1のカテゴリは、話したり聞いたりするといった、円滑な会話および対話をするための能力を意味する「会話・対話力」であった。第2のカテゴリは、どのような相手とでも関わる事ができる能力を意味する「社交性」であった。第3のカテゴリは、他者と関わり合い、良好な関係を構築し、維持するための能力を意味する「良好な関係構築力」であった。第4のカテゴリは、他者と相互に意思疎通し、理解し合うための能力を意味する「相互理解・意思疎通力」であった。第5のカテゴリは、自分の考えを他者に発信し、伝えるための能力を意味する「伝達力」であった。第6のカテゴリは、他者の前でも緊張せずに自然体でふだん通りの振舞いができることを意味する「自然体」であった。第7のカテゴリは、そのときの相手の気持ちやお互いの距離感、状況を適切に判断するための能力を意味する「状況把握力」であった。第8のカテゴリは、社会の中で生き抜くための能力を意味する「社会適応力」であった。8つのカテゴリにあてはまらない回答は「その他」とした。

次に、分類を行った学生とは異なる2名の大学4年生が自由記述回答を読み、Table3のカテゴリのいずれに当てまるか判断した。2名の一致率は74.4%であった。一致しなかったカテゴリについては、筆者を交えた協議によって、最終的に該当すると考えられるカテゴリを決定した。各カテゴリにあてはまる自由記述回答の度数をTable3に示す。もっとも度数が

Table3 大学生における“コミュニケーション力”イメージの自由記述の分類結果

カテゴリ名	記述例	度数	%
会話・対話力	人と会話を弾ませることができる能力 相手と沈黙になることなく対話を続けられること	51	29.82
社交性	初対面の人でも誰とでもすぐに仲良くなれること 社交性があること	35	20.47
良好な関係構築力	人と関係を円滑に保つことができる能力 他人とうまくいい関係を作っていける能力	30	17.54
相互理解・意思疎通力	他人と意思の疎通をはかる力 相手のことを理解し、自分のことを理解してもらうための力	15	8.77
伝達力	相手に言いたいことを伝える能力 自分から何かを発信したりすること	9	5.26
自然体	人といるときにナチュラルな自分でいられること 自由な発言ができること	7	4.09
状況把握力	人との距離感を上手につかむ能力 場を見ながら発言できること	5	2.92
社会適応力	社会を上手く生きていく力 社会に適応できる能力	2	1.17
その他	相手が何に関心を持ち、興味を持っているかを引き出すこと 相手の話を目や耳や心を使って聞くことができる能力	2	1.17
無回答		15	8.77
合 計		171	100.00

多かったのは、会話・対話力であった。次に社交性が多く、良好な関係構築力、相互理解・意思疎通力と続いた。

“コミュニケーション力”イメージと態度との関連

“コミュニケーション力”イメージの自由記述回答と“コミュニケーション力”に対する態度の関連を明らかにするために数量化Ⅲ類を行った。自由記述回答のカテゴリのうち、回答件数が少数であったカテゴリを近接する内容のカテゴリと統合した。他者との距離感や関係性の推測を含む状況把握力を良好な関係構築力に、他者への意思の伝達を含む伝達力を相互理解・意思疎通力に、相手に左右されずに自然な振舞いをするを含む自然体を社交性に統合した。度数の少なかった社会適応力とその他の回答は分析から除外することとした。その結果、“コミュニケーション力”イメージのカテゴリは、良好な関係構築力、会話・対話力、社交性、相互理解・意思疎通力の4つに集約された。“コミュニケーション力”に対する態度の各下位尺度については、平均値を基準に高低の2値に変換した。

解析の結果、第1軸の固有値は0.29、第2軸の固有値は0.25、第3軸の固有値は0.21であった。第1軸の正方向に“コミュニケーション力”に対する態度の各下位尺度の低群が布置され、負方向には高群が布置されたため、第1軸は“コミュニケーション力”に対する関

心の有無を示すサイズファクターとなっていると解釈し、本研究では第2軸と第3軸について検討することとした。第2軸と第3軸のカテゴリスコアを用いてクラスタ分析（Ward法）を行なったところ、3つのクラスタが抽出された。Figure1に、第2軸と第3軸のカテゴリスコアのプロットと3つのクラスタを示す。第1のクラスタには、会話・対話力、社交性、不確定性低、絶対性高、流動的汎用性高、測定可能性低がまとまった。第2のクラスタには、相互理解・意思疎通力と測定可能性高がまとまった。第3のクラスタには、良好な関係構築力、流動的汎用性低、絶対性低、不確定性高がまとまった。

社会的スキル得点について平均値より低い回答者を低群、高い回答者を高群とし、各群の第2軸と第3軸のサンプルスコアの平均値を算出した。その値を10倍し、ベクトル表記でFigure1に示した。社会的スキル低群は第1のクラスタ方向に布置され、社会的スキル高群は第2クラスタと第3クラスタの間の方向に布置された。

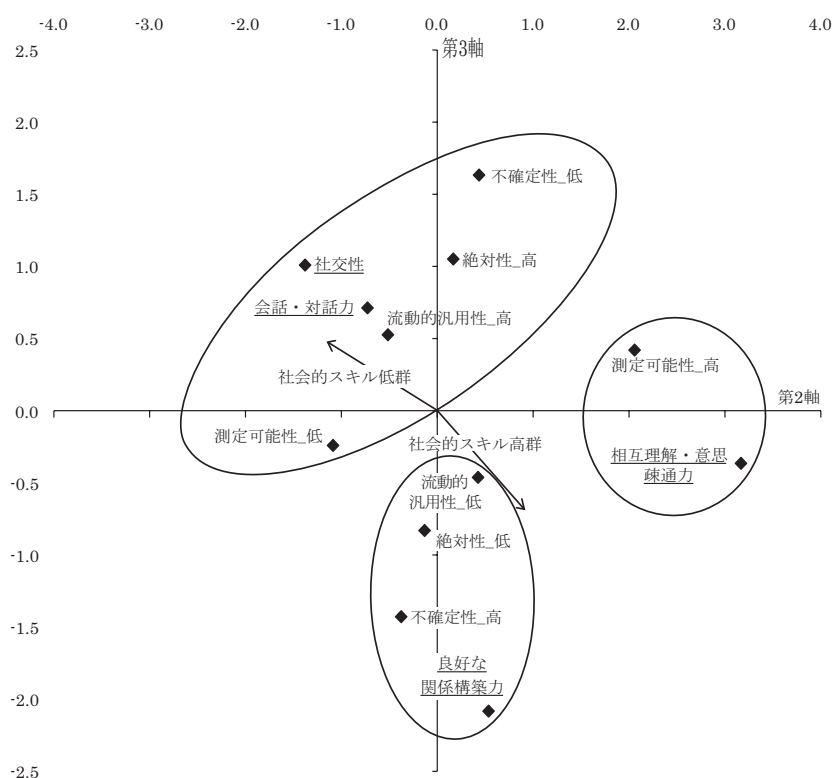


Figure1 “コミュニケーション力”イメージと“コミュニケーション力”のカテゴリスコアおよび社会的スキル高群・低群のサンプルスコア

注) 下線を引いたカテゴリは“コミュニケーション力”イメージのカテゴリである。

円で囲まれた範囲は同一クラスタであることを示す。

考察

“コミュニケーション力”に対する態度尺度について因子分析を行った結果、4因子構造が得られた。第1因子の不確定性には、渡部（2016a）の不確定性因子とほぼ同様の項目が高い負荷量を示していたが、渡部（2016a）で要求過剰性因子に含まれていた「今の社会は“コミュニケーション力”のない人を排除している」という項目が含まれる点で異なっていた。本研究の不確定性は、渡部（2016a）の不確定性因子よりも、“コミュニケーション力”の普及に対して懐疑的な内容であるといえる。第2因子の流動的汎用性には、渡部（2016a）の汎用性因子と要求過剰性因子の項目が高い負荷量を示していた。本研究の流動的汎用性因子は、“コミュニケーション力”の有効性を認め、特に現代社会において影響力が高まっているという評価を示すものである。第3因子の絶対性には、渡部（2016a）の絶対性因子とほぼ同様の内容を示した。本研究の絶対性因子には、渡部（2016a）で汎用性に属していた「“コミュニケーション力”があるかどうかは、その人にとって深刻な問題だ」という項目が高い負荷量を示しており、“コミュニケーション力”の絶対的価値をより明確に意味する因子となった。第4因子の測定可能性は渡部（2016a）と同内容の因子となった。¹測定可能性得点の平均値（Table2）をみると、渡部（2016a）と同様に理論的中間点を下回っており、“コミュニケーション力”を測定しがたい能力であるとみなす態度は、大学生の常態的な態度であると判断できる。以上より、5因子が抽出された渡部（2016a）とは異なり、本研究における因子分析では4因子構造となった。渡部（2016a）で要求過剰性因子に負荷していた項目が、本研究では主に流動的汎用性に負荷したことが、因子数の減少をもたらしていた。本研究の対象である女子大学の学生は、男女共学の大学の学生を含んでいた渡部（2016a）とは異なる環境で学生生活を送っており、この生活環境の違いが“コミュニケーション力”に対する態度の構造の違いを発生させたと推測される。生活環境のどの要素が態度に影響したのかについて、本研究の結果からは特定することができないが、本研究の対象者はふだんの生活の様々な場面で“コミュニケーション力”の必要性を実感しており、“コミュニケーション力”の求められる事態を自明のこととして受け入れている可能性がある。

渡部（2016a）では、社会的スキルの高低によって“コミュニケーション力”に対する態度に有意な差はみられず、“コミュニケーション力”に対する態度は本人の社会的スキルの程度とは独立したものであることが示唆されていた。一方、本研究では不確定性と絶対性が社会的スキルとの間に弱い負の相関を示した。この結果は、本研究の不確定性と絶対性が、渡部（2016a）の不確定性や絶対性よりも否定的な内容であったことを反映したものと考えられる。社会的スキル高群の回答者は、ふだんの生活の中で“コミュニケーション力”の発揮や獲得を求められることに抵抗感を感じないため、“コミュニケーション力”を過度に否定的には捉えないと推測される。ただし、本研究は男女の大学生が含まれた渡部（2016a）

とは異なり、女子大学生のみを対象としている。“コミュニケーション力”に対する態度と社会的スキルとの関連については、多様なサンプルを含む実証データを踏まえたさらなる議論が必要であろう。

“コミュニケーション力”イメージの自由記述を分類した結果、最も度数の多かったカテゴリは「会話・対話力」であった。女子大学生は、日常の対人場面で会話を円滑に進められる能力を“コミュニケーション力”と捉えていることが明らかとなった。また、「社交性」や「良好な関係構築力」も多く挙げられており、どのような相手とでも仲良くできることや関係を良好に保つことが“コミュニケーション力”であると捉えられている。以上の結果は、大学生が“コミュニケーション力”を会話の能力や積極性であると考えていることを示した小川（2010）の知見とおおよそ一致する。

“コミュニケーション力”イメージと“コミュニケーション力”に対する態度は3つのまとまりに分類された（Figure1）。第1は、“コミュニケーション力”を会話・対話力や社交性であるとするクラスタである。これらのイメージを持つ人は、“コミュニケーション力”が絶対的で幅広い影響力を持つと評価する傾向があった。他方、あいまいでわかりにくいと考える傾向や数値などで測定することができると思う傾向は低かった。会話・対話力に関する記述は、会話を途切れさせずに続けることや会話を弾ませることを示していた。社交性に該当する記述は、外向的でどのような相手に対しても臆せず関わっていく姿勢を表していた。これらの能力は、会話場面において積極的な行動として顕在化しやすいために、影響力が高く見積もられやすいと考えられる。さらに、会話・対話能力や社交性の記述は、対人行動の肯定的な側面という点では意味が一貫しているが、具体的な行動の量や程度を示す内容ではなかった。したがって、これらの能力を“コミュニケーション力”だとみなす回答者は、“コミュニケーション力”をあいまいなわかりにくい言葉だとは思わないものの、特定の指標で測ることまでは想定していないと推測される。

第2は、“コミュニケーション力”を他者との相互理解・意思疎通力であるとするクラスタである。このイメージを持つ人は、“コミュニケーション力”が数値などで測定可能であるとする傾向があった。相互理解や意思疎通は、お互いにどの程度相手の意見や感情を理解したかという観点から評価することが可能であるため、理解度を測定するという視点が生じると考えられる。このようなイメージを持つ人は、コミュニケーションを「計り知れない神聖なもの」とは考えず、情報のやり取りのような、ある程度実利的なコミュニケーション観を持っている可能性がある。

第3は、“コミュニケーション力”を良好な関係構築力であるとするクラスタである。このイメージを持つ人は、“コミュニケーション力”をあいまいな言葉だと考える傾向があった。加えて、“コミュニケーション力”を絶対的で幅広い影響力を持つ概念であるとみなすこ

とはなかった。良好な関係構築力に該当する記述は、関係が円満であることに焦点が当てられており、対人関係を開始したり維持したりするための方法は含んでいなかった。“コミュニケーション力”がどのような行動ができる能力なのか具体的に想定されておらず、わかりにくさや不信感に結びつきやすいと推察される。そのような不信感のために、“コミュニケーション力”が絶対的で広範な影響力をもつとは考えられないのであろう。

以上から、第1のクラスタに該当する人々は、“コミュニケーション力”という言葉に対して不信感を抱きにくく、社会において強い影響力があると考える傾向がある。第2のクラスタの人々は、“コミュニケーション力”を何らかの指標で把握することが可能であると考えている。第3のクラスタの人々は、“コミュニケーション力”に不信感を抱き、汎用的で強い影響力を持つと考えることが少ない。第1クラスタの人々は、コミュニケーションとは会話であるというコミュニケーション観を持っていると推定される。第1クラスタの人々にとって、良好なコミュニケーションとは円滑な会話や積極的な関わりである。そのためには、自らすすんで他者に接触し、会話を盛り上げる必要がある。こういった行動ができるかどうかは個人の能力に依存するところが大きいため、その能力を持った人のみが有利になると考えられやすいのであろう。第2クラスタや第3クラスタの人々は、他者との意思のやりとりや他者との関係の構築および維持という、他者を志向したコミュニケーション観を持っていると推定される。そのようなコミュニケーション観のもとでは、コミュニケーションの良否は自己の能力のみで決定されるものではなく、他者の反応によって変動するものと想定される。それゆえに、第2クラスタや第3クラスタの人々は、個人の“コミュニケーション力”の汎用性や影響力をそれほど高く評価することがないと考えられる。

Figure1 における社会的スキル低群および高群のベクトル表記をみると、低群は“コミュニケーション力”を会話・対話力や社交性であるとみなす傾向があった。社会スキル低群は、“コミュニケーション力”が高い人として、会話のうまい積極的な人物像を想定している。また、社会的スキル低群は、“コミュニケーション力”を社交性のようなあらかじめ個人に備わった特性的な能力だとみなしているため、“コミュニケーション力”が自らの努力によって学習できるとは考えていない可能性がある。一方で、高群は“コミュニケーション力”を良好な関係構築力や相互理解・意思疎通力のいずれかであるとみなす傾向がある。社会的スキル高群は、個人の“コミュニケーション力”のみで対人関係の様相が決定づけられるわけではないと考え、他者を志向したコミュニケーション行動を取ると推測される。

社会的スキルと“コミュニケーション力”イメージとの関連から、社会的スキルトレーニングについて次のことがいえる。社会的スキルの低い人は、コミュニケーションの良し悪しが会話力や社交性といった要因によって左右されると考える傾向がある。これらの人は、積極的に快活な行動が“コミュニケーション力”の高さを示すとみなし、そのような行動が取

れない場合に“コミュニケーション力”を身につけることを諦めたり、他者と接することを避けたりする恐れがある。社会的スキルの低い人をトレーニングに参加させる場合、コミュニケーションが他者の反応や状況要因からも影響を受け、自己の行動のみでは決定されないという事例を示すことで、トレーニングへの動機づけを高めることが期待される。

本研究で得られた“コミュニケーション力”イメージのカテゴリには、トラブルの解決や関係の解消といった、対人関係の否定的側面に対処する能力は含まれなかった。本研究の回答者である女子大学生は、他者との間にネガティブな出来事が起こったときの対処能力というよりも、そもそもネガティブな出来事が起こらない良好な関係を形成する能力を“コミュニケーション力”であるとみなしていた。また、本研究から、“コミュニケーション力”イメージは、コミュニケーションを「会話」とみなすのか、「意思のやりとり」とみなすのかといった、コミュニケーション観によって形成されていることが示唆された。

本研究では、“コミュニケーション力”イメージの自由記述回答の分類において、1つの回答に複数の内容が含まれる場合は、最初に記入されている内容を基準に特定のカテゴリに分類するという方法をとった。このことは、回答者が持つ多層的な“コミュニケーション力”イメージを単純化して捉える結果となっている。この方法をとったことで、“コミュニケーション力”イメージと態度との関連を検討する分析においても、回答者が持つイメージのうち、分類対象とならなかった側面と態度との関連が考慮されなくなった点は、本研究の大きな課題である。それに加えて、本研究の対象者は、単一の大学に属する就業経験を持たない女子大学生であった。今後は、さらに多様な属性の人々を対象として、“コミュニケーション力”イメージ、“コミュニケーション力”に対する態度、社会的スキルについて、多面的な検討を重ねることが求められる。

引用文献

- 相川 充 (2009). 新版人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学— サイエンス社
- 文化庁 (2017). 平成28年度「国語に関する世論調査」の結果の概要 http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h28_chosa_kokka.pdf (2017.09.22閲覧).
- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P. (1980). *Skill-Streaming the Adolescent: A Structured Learning Approach to Teaching Prosocial Skills*. Illinois: Research Press.
- Hargie, O. (2006). Skills in theory: communication as skilled performance. In Hargie,

- O. (Ed.) *The handbook of communication skills. 3rd ed.*, London: Routledge. 7-36.
- 平井 智尚 (2009). 「コミュニケーション能力」を批判することの困難さ—メディア・テキストの分析を足がかりとして— 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 67, 113-129.
- 平田 オリザ (2012). わかりあえないことから —コミュニケーション能力とは何か— 講談社.
- 川島 裕子・加藤 慎司・芝木 邦也 (2014). 教師に求められる「コミュニケーション能力」の言説を読み解く—文部科学省の政策に注目して— 北海道教育大学紀要 (教育科学編), 64 (2), 165-179.
- 貴戸 理恵 (2011). 「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに 岩波書店
- 菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 菊池 章夫 (2007). 社会的スキルを測る—KiSS-18ハンドブック— 川島書店
- 仲 潔 (2012). 〈コミュニケーション能力の育成〉の前提を問う—強いられる〈積極性/自発性〉— 社会言語学, 12, 1-19.
- 小川 一美 (2010). 大学生にとってのコミュニケーション力とは 電子情報通信学会技術研究報告, Hcs, ヒューマンコミュニケーション基礎, 109 (457), 17-18.
- 小川 一美 (2012). コミュニケーション力とは 大坊郁夫 (編) 幸福を目指す対人社会心理学—対人コミュニケーションと対人関係の科学— ナカニシヤ出版, pp.211-212.
- 小川 一美・矢崎 裕美子・斎藤 和志 (2008). 大学生がイメージする「コミュニケーション力」と職業に対する志向性—愛知淑徳大学生を対象として— 愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーション, 2, 31-41.
- 小川 一美・矢崎 裕美子・斎藤 和志 (2009). 学生にとっての「コミュニケーション力」とは (2) —インターンシップ研修による変化— 日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 546.
- 太田 昌志 (2014). コミュニケーション能力によって評価することを誰が望ましいと考えるか 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 66, 90-91.
- 斎藤 和志・小川 一美・矢崎 裕美子 (2011). インターンシップ研修による“コミュニケーション力”観の変化 日本社会心理学会第52回大会発表論文集, 241.
- 芝崎 順司・近藤 智嗣 (2008). Webを利用したリアルタイム評価支援システム REAS の機能と運用 メディア教育研究, 4, 29-35.
- 太幡 直也 (2016). 大学生のチームワーク能力を向上させるトレーニングの有効性—チームワーク能力の構成要素に着目して— 教育心理学研究, 61, 118-130.
- 東京工芸大学 (2012). 全国の大学生コミュニケーション調査 調査結果

http://www.t-kougei.ac.jp/static/file/university-student_communication.pdf
(2017.09.14閲覧).

渡部 麻美 (2016a). 大学生の“コミュニケーション力”に対する態度の探索的検討 人文・社会科学論集, 33, 75-92.

渡部 麻美 (2016b). 首都圏勤労者の“コミュニケーション力”に対する態度—自己評価レベルによる検討— 日本パーソナリティ心理学会第25回大会発表論文集, 145.

渡部 麻美 (2017). 大学初年次教育におけるコミュニケーションスキル・トレーニングの実践 人文・社会科学論集, 34, 41-55.

矢崎 裕美子・小川 一美・斎藤 和志 (2009). 学生にとっての「コミュニケーション力」とは (3) —保育実習経験による違いの検討 日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 547.

脚注

1. 第4因子に.40を超える負荷量を示した項目は2項目のみであった。しかし、渡部(2016a)や社会人を対象とした渡部 (2016b) においても、同様の2項目が測定可能性因子に高い負荷量を示していることから、測定可能性因子がサンプルの違いによらず一貫して抽出される因子であるとみなし、本尺度を4因子構造の尺度として取り扱うこととした。

付記

2. 本研究は、2014年度東洋英和女学院大学研究助成を受けて実施された。
3. 本研究の一部は、日本パーソナリティ心理学会第26回大会において発表された。
4. 分析にあたって、東洋英和女学院大学（当時）の石田百合恵さん、市川里紗さん、井上明日香さん、大畑友季さん、高橋万葉香さんにご協力いただきました。深く感謝いたします。

Relationship between Image of and Attitude toward Communication Skills in Japanese Undergraduate Students

WATANABE Asami

Abstract

In recent years, “communication skills” have become necessary for young people and are widely and commonly used. This study investigated the relationship between the image of and attitudes toward “communication skills” and social skills in female university students. The results revealed that the students regarded “communication skills” as conversational ability, sociability, relationship-forming ability, and mutual-understanding ability. Students who regarded “communication skills” as conversational ability or sociability thought of it as a concept that had strong influence. Students who regarded “communication skills” as a relationship-forming ability were uncertain about it. Students who regarded “communication skills” as mutual-understanding ability thought of it as a measurable concept. Student with low social skills tended to regard “communication skills” as conversational ability or sociability.

